

探討言語單位之近代小說文法

——從巴赫京的對話性來看典型文章結構之意義——

落合由治

淡江大學日本語文學系教授

摘要

現在的日本語學、日本語教育通常是考察從具體的使用場景或類別獨立出來的社會言語。然而，為了運用言語或創造，我們有必要考察置之於具體的使用場景或社會相關的類別上發揮機能的言語表達。其先驅者可謂是米哈伊爾·巴赫京(1895-1975, Михаил Михайлович Бахтин)。巴赫京他提出語言對話理論的重要概念。本論文以米哈伊爾·巴赫京所提出的對話理論為依據，釐清屬於社會性類別的文本之一的芥川龍之介作品《黑衣聖母》中，使用的言語形式之特徵。

考察結果顯示：芥川龍之介將兩種文章構造組合成一部作品。形式之一是、使用近代廣為常用的敘述經驗或傳聞的形式，提示關鍵話題。另一形式則是在設定敘述者與聽者在場的前後文當中夾雜入話題的型式。此形式營造出可視為聽者之一的讀者，也實際聽到那關鍵話題的臨場感。

此形式給予了聽者之一的讀者有身如其境等，類似說者無意聽者有心的認知(framing)偏誤效果。且此般形式的例型，在常見的現代中也經常被使用的文章結構表達。

若能明白確立文本的類別，不僅可提示言語形式以及用法規則性之外，亦能展示出該文本之對話性機能。本研究除了達成上述的目標，亦可謂開啟了將成果應用於日本語教育等的言語研究之門。

關鍵詞：巴赫京、對話性、芥川龍之介、文本、日本語教育

言語単位としての近代小説の文法
——バフチンの対話性から見る典型的文章構成の意味——
落合由治
淡江大学日本語文学科教授

要旨

現在の日本語学、日本語教育では言語をラングとして、具体的な使用場面やジャンルから切り離して考察するのが前提になっている。しかし、言語の運用や創造のためには具体的な使用場面や社会的ジャンルにおいて機能している言語表現を考察する必要がある。その先駆者と言えるミハイル・バフチンは言語考察の原理として具体的な社会的ジャンルを持って生み出されたテクストの対話性を提起した。本論文は、バフチンの対話性を手がかりにして、社会的ジャンルにおけるテクストの事例として、類例が非常に多く見られ現代でも用いられている文章構成の型を持つ芥川龍之介「黒衣聖母」の文章構成とそこで使用される言語形式の特徴を考察した。

その結果、芥川龍之介は近代に広く使用されている体験や伝聞を語る形式を用いて中心的な話題を提示しながら、その前後に語り手と聞き手の場面を設定する前言と後言で、それを挟み込んで、実際にその話しを読者が聞いているかのような臨場感を生み出し、実際にそうした出来事があったと思わせる文章構成を使用していた。これは、聞き手としての読者にリアリティーを与えるフレーミング効果を生み出す形式と言え、現代でも使用されている。

具体的ジャンルを持ったテクストからは、言語形式と用法の規則性ばかりではなく、そのテクストの対話的機能を見出すことができ、それが日本語教育などへの応用の道を開くと考えられる。

キーワード：バフチン、対話性、テクスト、芥川龍之介、日本語

**Grammar of the modern novel as the language unit: Meaning
of the typical sentence constitution judging from an interactivity of
Bakhtin**

Ochiai, Yuji

Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

There are current science of Japanese language study and Japanese education assuming considering a language (Lang) that is separated from a concrete scene and genre on usage. However, for use and the creation of language, it is necessary for us to consider the verbalization functioning in a concrete use scene and a social genre. Mikhail Bakhtin to be able to tell to be the pioneer submitted the interactivity of text as a principle of language consideration. This article considered sentence constitution of Ryunosuke Akutagawa "Kokuiseibo" and the characteristic of linguistic form used there as an example of the text in the social genre with an interactivity of Bakhtin as a clue.

As a result, Ryunosuke Akutagawa put two sentence constitution forms together in this work. One of the forms is a part showing a central topic using a form to talk about an experience and hearsay used widely in modern times. Another form puts it by foreword and back word biting to set the scene of a narrator and the listener. This form really brings about a sense of reality as if a reader hears the story.

This is a text vehicle to produce framing effect giving reality to the reader as the listener. This form is a model of the sentence constitution that a similar instance is seen a lot so many, and is used in the present age.

The text with the concrete genre can show the interactive function of the text as well as a linguistic form and the regularity of the use. It opens the way of the application of the language study to Japanese education more.

Keywords: Bakhtin, interactivity, text, Ryunosuke Akutagawa, Japanese



言語単位としての近代小説の文法
——バフチンの対話性から見る典型的文章構成の意味——
落合由治
淡江大学日本語文学科教授

1. はじめに

現在の日本語学での研究対象からみると、その研究分野は「歴史、研究資料（史的研究、現代）、文法（史的研究、理論・現代）、語彙（史的研究、理論・現代）、音韻（史的研究）、文字・表記（史的研究、理論・現代）、文章・文体（史的研究、理論・現代）、社会言語・言語生活、地域言語・方言、数理的研究、海外における日本語研究（アジア、欧米語圏）」のように区別されている。¹その中で文法は歴史的研究であれ現代語についての研究であれ、語彙、音韻、文字・表記、文章・文体という言語単位や言語形式と区別される研究対象になっており、また文章・文体、社会言語・言語生活、地域言語・方言という実際に言語が社会的に用いられる場面やジャンルからは切り離された研究課題に位置づけられている。具体的に文法の対象になっているのは、「品詞・名詞・形容詞・助詞（格、主題・とりたて）、活用・動詞・ボイス、テンス・アスペクト、モダリティ、語彙形式の文法的性格（オノマトペ・形式語・数量詞・移動動詞）、複文、テキスト・談話・コミュニケーション・敬語」で、これらと別に「対照研究、認知言語学、コーパス研究、構文」があげられている。²ここから見れば文法は、文中での語彙や品詞の機能や、文形式の構造と機能、文章・談話中の語彙や文形式の機能の研究が主な対象と考えられていることが分かる。一方、日本語教育でも文法

¹ 2年ごとに出されている日本語学会の学会動向での対象区分による。日本語学会編（2014）「<特集>2012年・2013年における日本語学界の展望」『日本語の研究』10-3 日本語学会を参照。

² 同上、前田直子（2014）「文法（理論・現代）」「<特集>2012年・2013年における日本語学界の展望」pp. 25-32 参照。

は日本語教育文法の提唱からも明らかなように、日本語学の文法の概念と重なる、文中での語彙や品詞の機能や、文形式の構造と機能、文章・談話中の語彙や文形式の機能の研究が中心課題に充てられている。³確かに以上見てきた現在の日本語学での主要な研究パラダイムのように実際に使用する場面を考えることなく文形式や文中での語彙、語形式の機構や機能を文法研究として探求することには、今まで蓄積された膨大な研究業績から見ても非常に大きな意味があるとも言えよう。

しかし、台湾での日本語教育現場を考えれば分かるように、日本語学習者の視点で考えれば、場面と切り離された文形式や文中での語彙、語形式の機構や機能の説明では、日本語が実際に使用される社会的ジャンル⁴や場面、その中の表現目的に応じた機能など、実際に日本語を読解、作文、会話、聴解する場合の方向性を決めることができない。たとえば日本語学習者には習得が難しい丁寧体と普通体の切り替えであるが、これは会話場面では親疎・内外・上下・公的私的のような日本社会の具体的社会的関係を表現していると同時に、書記場面では手紙か報告、論文か、コミュニケーション重視か客観的内容重視かのような多様な社会的ジャンルを持っている。いつ、どこで、誰が、誰に、何を、何のために、どのようにそれを使うのかが明確に経験され學習されて初めて、日本語学習者が生活や職場で出遭う日本語使用場面での言語使用や運用方略の見通しが立てられる。言語の使用場面を中心に言語形式の機能を考察し、それを第二言語學習に取り入れる動きは、日本語学でも日本語教育で

³ 鹿功雄(2012)「日本語教育文法の現状と課題」『一橋日本語教育研究』1 pp. 1-12 参照。

⁴ 言語の社会的ジャンルとは、各主体が社会的な言語使用の場面でそれぞれおこなっている多様な言語表現の運用で、日常的場面で会話を交わし、電話やネットでやりとりすることから仕事、社会生活、さらにメディア、政治や経済等の制度的分野等の無数の分化を示している。高橋伸一、佐々木亮(2014)「バーチャルの「言語的多様性」と「発話」の応用可能性：試論：言語教育と言語芸術への新たなアプローチ」『京都精華大学紀要』45 pp. 88-11 参照。

も次第に顕著になってきている⁵。

2. 形式重視と場面重視を統一する対話性の原理

以上、見てきたように現在の言語研究での言語の規則性の研究である文法研究は、場面から切り離した言語単位を中心に研究する客観論的文法⁶と場面における言語形式の機能を探求する場面論的文法とに分かれるが、一般的には場面や言語主体の個性を問わない語や文についての一般的な規則や特徴の研究を指すと理解されている。なぜ、このように実際の使用と離れた言語研究が言語研究として重視されるようになっているのか、その問題についてのひとつの見解は、ミハイル・バフチンの対話性の原理の考察に見られる。丹治恒次郎（1998）によれば、バフチンは、言語を捉える言語観を二種類に分けている。第一の方向は、言語観における個人主義的な主觀主義で、これにたいして第二の方向は抽象的な客觀主義である。第一の主觀主義は、その言語世界が実在するためには、結局は、一人一人の人間が発話をすることが不可欠であり、言語の世界はそういった個人の発話を基づくのだということが基本的な考え方になっている。この考え方によれば、言語現象は、いわば芸術的活動に類似し

⁵ 早くは、小川治子（1993）「『すみません』の社会言語学的考察」『言語文化と日本語教育』6 pp. 36-46 等のように言語形式と使用場面の考察や、大野春見（1994）「初級文法項目における絵で表す場面情報の役割」『日本語教育方法研究会誌』1-2 pp. 40-41 等のように場面情報を文型に付加する教授法の工夫から始まり、松丸真大（2003）「原因・理由を表す接続助詞の切換え」『阪大社会言語学研究ノート』5 pp. 97-113、田所希佳子（2007）「初級におけるコミュニケーションのための文型練習の方法-「場面ドリル」の提案」『早稲田大学日本語教育実践研究』6 pp. 91-101、葦原恭子（2011）「日本語の談話におけるコミュニケーション機能-「わかる」と「知る」を中心に」『留学生教育』8 pp. 1-18 等、場面と言語形式を一体のものとして考察する日本語学、日本語教育の研究は広がりを見せている。

⁶ 言語研究における客觀主義とは、主体とは独立した言語形式と機能がそれ自身で社会的に存在し、主体はその客体的規則に従って言語を運用するという実証主義あるいは構造主義的立場で、こうした見方は人文社会系の研究にも広がっており、近年、再検討が始まっている。一例として、嶋村誠（1999）「客觀主義意味論と認知意味論のパラダイム」『商學論究』46-4 pp. 31-45 参照。

たものになる。一方、第一の言語観では、個々の発話すなわち個々の言語的創造行為は、本質的にはまったく個別的なものであり、原理上は繰り返しのきかないものとならざるをえない。しかし、個々の発話は特定の言語共同体のなかで、他の人たちの無数の発話が採りいれている共通の要素群によってなりたち、その言語共同体のなかで用いねばならない同一の規範的な要素がある。それは、音声や文法や語彙などの要素で、言語の音声形式、文法形式、語彙形式の総体としての言語体系（ラング）が存在する。その体系からはずれると言語コミュニケーションは成立しなくなる。⁷言語観としての第一の個人主義的な主観主義はソシュールのパロールにあたり、第二の抽象的な客観主義による言語研究はソシュールのラングによる言語研究と言えよう。現代の日本語学では、第二の抽象的な客観主義によるラングの研究が言語研究の中心課題であるというパラダイムで今まで研究が進んできたと言える。しかし、外国語として日本語を学ぶ日本語学習者が増大するにつれて、第一の個人主義的な主観主義による言語運用者が多くなってきたため、どうそれを表現するかというパロールの考察が求められている状況になっている。

だが、バフチンは、前者の個人による言語も後者の個人を離れた一般的言語とともに言語の成立条件ともいえる人間の社会性を捨象しているとして、この二つの傾向を乗り越える必要があるとしている。つまり、個人主義的な主観主義による言語運用は、たしかに抽象的な客観主義では理解し得ない言語の具体的運用や表現機能を取り上げることはできるが、それは個性を追求する芸術的言語表現が中心であり、必ずしも社会的場面で実用的なコミュニケーションをするには向かないという問題が生じるということである。たとえば日本語学習者が個人主義的な主観主義による言語運用のモデルとして、メディア作品の会話や文体を使用した場合、作品中での登場者

⁷ 丹治恒次郎（1998）「言語コミュニケーションと表現の概念：バフチンとヴァリ－から考える」『言語と文化=語言与文化』1 pp. 16-18 参照。

のキャラクターを示すために使われている役割語や過剰敬語あるいは卑罵語などを、社会的なコミュニケーションでも一般的に使えるラングと考えて模倣してしまうことはよくある。バフチンは、こうした問題を乗り越える言語観として対話性の原理を提起した。その要点は以下のようにまとめられている。⁸

- ①言語の自己同一性〔存在証明〕が言語の形によって保証されるという安定した体系として捉えられた言語は、たんに学問的な抽象の所産にすぎない（強調はすべて著者、以下も同じ）。その抽象は、特殊な理論的・実用的な目的にのみ役立つにすぎない。またこの抽象は、言語の具体的な現実を、充分な方法によって理解しているのではない。
- ②言語は、絶えざる生成の過程をつくりだす。その過程は、話者たちの社会的な言語的相互作用によって実現される。
- ③言語的な生成の法則は、けっして個人心理の法則ではない。だが、生成の法則は、語る主体の活動から切り離すことはできないであろう。言語的な生成の法則は、本質的に、社会学的な法則である。
- ④言語がもつ創造性は、芸術的な創造性や、個々のイデオロギーが採る創造性の形とは、一致しない。しかし、それと同時に、言語がもつ創造性は、それに結びついているイデオロギー的な内容や価値から独立したものとしては、理解することができない。言語的な生成は、あらゆる歴史的生成とおなじように、機械論的な盲目的必然性として捉えられることがあるが、ひとたびその必然性が意識され望まれる必然性となつたときには、それが《自由による必然性》に替わりうる。
- ⑤発話の構造は、まったく社会的な構造である。発話は、そのようなものとして、話者たちの間でしか実質的なものではない。個人の（狭い意味での個人の）言葉があるということは

⁸ 同上 pp. 21-38 参照。

[個人の言葉は] 形容矛盾*contradictionadjecto*である。⁹

言語の対話性の原理は、社会的コミュニケーションの中で用いられている言語表現は必ず、表現主体がある相手に向けて具体的な表現意図を持って一定のジャンルの表現様式にしたがって発話したり、書記したりすることで、初めて社会的表現として機能していることを示している。先に挙げた日本語学習者の誤解で言えば、学習者は自分がテレビで見ている会話を、日本社会での日本人一般の会話としてではなく、その言語表現が位置づけられた場面に戻して、その会話を用いているドラマという言語ジャンルの社会的機能とそのドラマのストーリー等を理解する必要がある。それによって、初めてこの卑罵語は実際の日本の社会生活では使ってはいけない言い方だが、ドラマを盛り上げ、主人公の個性を特立するために芸術的用法として使われていたのだということが分かる。対話性の原理とは、どのような表現であれ相手に何かを伝えようとしている場合には、その社会が持っている表現の様々な社会的表現ジャンルの機構と機能に従って、その一つを選び言語、非言語の表現を構成して初めて、コミュニケーション機能を持つということである。つまり、すべて人間社会の表現は言語、非言語あるいはマルチモーダル¹⁰を問わず、一定の社会的表現ジャンル性を持って構成される必要があり、言語研究の対象も表現の社会的ジャンルの中にある具体的表現を取り上げて初めて、社会的に一般に用いられている表現の規則＝ラングと同時に、具体的にいつ、どこで、誰が、誰に、何を、何のために、どのようにそれを使うのかという用法＝パロールとを一体のものとして理解できることになる¹¹。

⁹ 同上 pp. 37-38 参照

¹⁰ マルチモーダルは、複数の表現様式が密接不可分に結びついて表現されている活動や表現物で、たとえばすべての身体的音声的動きや特徴を含んだ相互作用的談話行動や各種メディアのコンテンツなどの表現物等の特徴を意味する。一例として、社会言語科学会（2011）「特集「相互作用のマルチモーダル分析」」『社会言語科学』14-1 参照。

¹¹ 言語の対話性についての考察と日本語教育への応用は、西口光一（2013）『第

では、こうした対話性の原理における表現単位、すなわち一定の社会的表現ジャンル性を持って具体的に構成される表現単位は何か。それは、文章・談話あるいはテクスト、つまり特定の主体のその都度の意図によって、社会的に存在する一定ジャンルのまとまった言語表現として具体的に表出された各種モーダルによる言語非言語表現である。¹²文法としてすぐに想起される語と文は、テクストを構成する下位の単位で、それだけではジャンル性を決めるることはできず、対話性を帯びていない。また、語と文の一般的規則や特徴は、分析して整理し量的に処理しうるレベルの表現で、かなり単純化、一般化しうる、言わば変数の次元の少ない関数的傾向を持っている。ただ、これらは当然、あるジャンルに限ったデータとしてみれば、ジャンル的特徴やその中のテクスト作者の個性を帯びてくる¹³。ここでは、テクストレベルでの表現形式と用法を文法と呼ぶことにする。一方、具体的ジャンルを持ったテクストレベルでの文法は極めて質的な特徴を持ち、語や文の研究法とは異なる質的研究方法に

二言語教育におけるバフチン的視点—第二言語教育学の基礎として』くろしお出版、西口光一（2015）「ことばのジャンルと基礎第二言語教育のデザイン」『多文化社会と留学生交流：大阪大学国際教育交流センター研究論集』19 pp. 1-11 参照。

¹² 音声言語中心か書記言語中心かの相違、また言語、非言語の様々な表現の組み合わせによって非常に多様なテクストが現代では流通しているが、こうしたマルチモーダル性は歴史的に形成されてきたものもある。

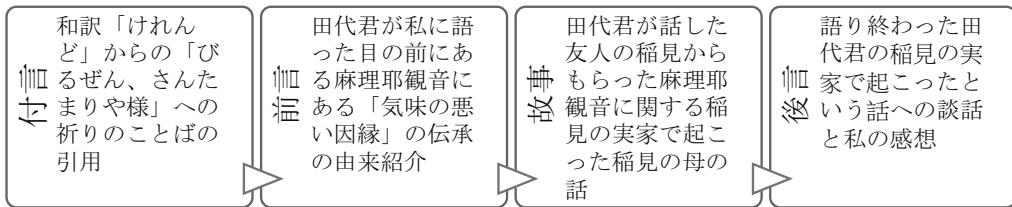
¹³ 言語に関する数量的データあるいは電子的データを利用してある具体的な表現ジャンルを持ったテクストを資料にした語彙研究や文型研究は1940年代の波多野完治（1941）『文章心理学入門』三省堂から始まり、それに続く安本美典（1958）「文学の統計的研究法について」『統計科学研究』2-2 pp. 19-26、等以来続いているが、近年は再活発化している。一例として、田中誠（2011）「『ノルウェイの森』における「ように」の翻訳研究—異なる翻訳者はどう表現したか」『長崎国際大学論叢』11 pp. 9-20、馬場俊臣「接続詞の二重使用の承継順序及び文体差：『現代日本語書き言葉均衡コーパス』全ジャンルによる追加調査』『北海道教育大学紀要. 人文科学・社会科学編』65-1 pp. 1-17、内田諭、藤井聖子（2015）「クラスター分析とフレーム分析による語彙のジャンル別特徴：『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いて」『言語文化論究』(34) pp. 21-34 等参照。これは、ジャンルを持つテクストから抽出された語や文には他のジャンルと区別できる一定の特徴があることを示している。しかし、語や文からそのジャンルのテクストを再現できるわけではない。

拠って一定の規則性を見出すことができる。今回、本論文が対象にしている近代の小説作品も、小説として、日本の近代という時代の社会的ジャンルの中で一定の質的特徴を持つ、文章レベルの書記言語による言語テクストである。それは元来、作家が個性を追求し競っているジャンルのために、その有り様は極めて多様ではあるけれども、それでも質的研究法のひとつである事例研究によれば、明確な特徴を見出すことができる。¹⁴以下では、近代の作家によく見られる文章構成を持った、一つのタイプの典型的な小説として芥川龍之介「黒衣聖母」を事例に取りあげて考察してみたい。

3. 近代小説のひとつの典型「黒衣聖母」の文法

3.1 「黒衣聖母」の文章構成

図1 「黒衣聖母」の文章構成



テクストとしての「黒衣聖母」は、従来の芥川龍之介作品研究の中では「キリスト教のもの」とされて、その素材や題材との関係が問題にされることが多かった。¹⁵しかし、文章構成から見ると以上のように、付言、前言と後言、そしてその中に置かれた故事という三

¹⁴ 歴史的な存在として明治以降の日本の近代に成立した小説テクストを指す。これらは描く対象や主題が変化したというばかりではなく、言語的に様々な特徴をもっている点でも以前の時代とは区別される表現史的な変化である。ぎょうせい(2013)特集「近代小説の文体」『国語と国文学』90-11等を参照。

¹⁵ 「きりしたん物」の題材を探った研究として須田千里(2011)「芥川龍之介『切支丹物』の材源--『るしへる』『じゆりあの・吉助』『おぎん』『黒衣聖母』『奉教人の死』』『国語国文』80-9 pp. 35-53 参照。また、題材との関係で作品の特徴を考察し「私」の語りの問題を指摘した研究として姜惠彬(2013)「芥川龍之介『黒衣聖母』論：メリメ『イールのヴィナス』との比較分析を通じて」『稿本近代文学』38 pp. 15-24 参照。

種の異質な文章で構成されている。

3.2 付言

まず、付言であるが、作品冒頭の「けれど」からの引用は、作品中に取り上げられた麻理耶観音の主体である聖母マリアへの祈りの言葉で、例1のように作品本文の前に付けられて作品の重要な題材である聖母マリアへの祈りの言葉を取り上げている。なお、以下、本文の引用にある番号、記号、下線類はすべて論者に拠る。振り仮名は読みやすさを考えて省略した。

例1

——この涙の谷に呻き泣きて、御身に願いをかけ奉る。……御身の憐みの御眼をわれらに廻らせ給え。……深く御柔軟、深く御哀憐、すぐれて甘くまします「びるぜん、さんたまりや」様——
——和訳「けれど」——

芥川龍之介の作品には、以下の例のように作品の最初に、続く部分の導入になるような、古典や海外の作品からの引用がしばしば置かれている。これらを付言と呼ぶことにする。¹⁶

例2 「枯野抄」

丈艸、去來を召し、昨夜目のあはざるまま、ふと案じ入りて、舟に書かせたり、おのおの咏じたまへ
旅に病むで夢は枯野をかけめぐる

——花屋日記——

例3 「奉教人の死」

たとひ三百歳の齢を保ち、楽しみ身に余ると云ふとも、未來永々の果しなき楽しみに比ぶれば、夢幻の如し。

——慶長訳 Guia do Pecador——

善の道に立ち入りたらん人は、御教にこもる不可思議の甘味を覚ゆべし。

——慶長訳 Imitatione Christi——

芥川の作品で、こうした付言は作品の舞台設定やテーマに関して間接的に提示する重要な役割を担っていると言えよう。

3.3 前言・故事・後言

¹⁶ 芥川龍之介の小説の冒頭から結末までの文章構成に関する総合的研究は、永尾章曹（1991）「近代小説の表現.4 芥川龍之介—文章構成について」表現学会編『表現学大系・各論篇』12 教育出版センターを参照。

この後に続く部分は、二種類の文章に分かれている。作品はまず、田代君が目の前にある麻理耶観音に関する因縁話の存在を教え、私がそれに興味を示して聞こうする部分から始まっている。その後に、この小説の中心的内容として、田代君が友人の稻見から聞いた母親が体験した麻理耶観音に関する因縁話がある。そして、因縁話が終わった後、再び、その話を聞かせた田代君の説明や私の見方を書いている節で作品は終わっている。この作品は、直接、中心的内容である麻理耶観音に関する因縁話から始まるのではなく、その話の前と後に、田代君と私という二人の人物が目の前にある麻理耶観音を見ながら、因縁話を始め、話しが終わった後に田代君と私が話しの感想を述べるという形式で書かれている。本題である因縁話を故事、その前にある部分を前言、後にある部分を後言とする。

なぜこうした前言や後言が故事の前後に置かれるのであろうか。その理由は、因縁話の内容面からのアプローチから考えることもできるが、文章構成から見ると、こうした形式が採られている理由がよく理解できる。

3.3.1 故事の文章構成

作品の中心である故事から見ていきたい。なお、例文のローマ数字は段落番号、○数字は文番号で、説明の I ①は第一段落文①を示す。枠囲い、各種下線部もすべて論者に拠る。

例 4 故事

I ①この麻利耶観音は、私の手にはいる以前、新潟県のある町の稻見と云う素封家にあったのです。②勿論骨董としてあったのではなく、一家の繁栄を祈るべき宗門神としてあったのですが。

II ①その稻見の当主と云うのは、ちょうど私と同期の法学士で、これが会社にも関係すれば、銀行にも手を出していると云う、まあ仲々の事業家なのです。②そんな関係上、私も一二度稻見のために、ある便宜を計ってやった事がありました。③その礼心だったのでしょうか。④稻見はある年上京した序に、この家重代の麻利耶観音を私にくれて行ったのです。

III ①私の所謂妙な伝説と云うのも、その時稻見の口から聞いたのですが、彼自身は勿論そう云う不思議を信じている訳でも何でもありません。②ただ、母親から聞かされた通り、この聖母の謂われ因縁をざつと説明しただけだったのです。

IV ①何でも稻見の母親が十か十一の秋だったそうです。②年代にすると、黒船が浦賀の港を擾がせた嘉永の末年にもう当たりますか——その母親の弟になる、茂作と云うハツばかりの男の子が、重い麻疹に罹りました。③稻見の母親はお栄と云って、二三年前の疫病に父母共世を去って以来、この茂作と姉弟二人、もう七十を越した祖母の手に育てられて来たのだそうです。④ですから茂作が重病になると、稻見には曾祖母に当る、その切髪の隠居の心配と云うものは、一通りや二通りではありません。⑤が、いくら医者が手を尽しても、茂作の病気は重くなるばかりで、ほとんど一週間と経たない内に、もう今日か明日かと云う容体になってしまいました。

V ①するとある夜の事、お栄のよく寝入っている部屋へ、突然祖母がはいって来て、眠むがるのを無理に抱き起してから、人手も借りず甲斐甲斐しく、ちゃんと着物を着換えさせたそうです。②お栄はまだ夢でも見ているような、ぼんやりした心もちでいましたが、祖母はすぐにその手を引いて、うす暗い雪洞に入気のない廊下を照らしながら、昼でも滅多にはいった事のない土蔵へお栄をつれて行きました。

VI ①土蔵の奥には昔から、火伏せの稻荷が祀ってあると云う、白木の御宮がありました。②祖母は帯の間から鍵を出して、その御宮の扉を開けましたが、今雪洞の光に透かして見ると、古びた錦の御戸帳の後に、端然と立っている御神体は、ほかでもない、この麻利耶観音なのです。③お栄はそれを見ると同時に、急に蟬の鳴く声さえしない真夜中の土蔵が怖くなつて、思わず祖母の膝へ縋りついたまま、しくしく泣き出しました。④が、祖母はいつもと違つて、お栄の泣くのにも頓着せず、その麻利耶観音の御宮の前に坐りながら、恭しく額に十字を切つて、何かお栄にわからない御祈祷をあげ始めたそうです。

VII ①それがおよそ十分あまりも続いてから、祖母は静に孫娘を抱き起すと、怖がるのを頻りになだめなだめ、自分の隣に坐らせました。そうして今度はお栄にもわかるように、この黒檀の麻利耶観音へ、こんな願をかけ始めました。

VIII ①「(前略)もし唯今茂作の身に万一の事でもございましたら、稻見の家は明日が日にも世嗣ぎが絶えてしまうのでございます。そのような不祥がございませんように、どうか茂作の一命を御守りなすって下さいまし。それも私風情の信心には及ばない事でございましたら、せめては私の息のございます限り、茂作の命を御助け下さいまし。(中略)何卒私が目をつぶりますまでよろしゅうござりますから、死の天使の御剣が茂作の体に触れませんよう、御慈悲を御垂れ下さいまし。」

IX ①祖母は切髪の頭を下げて、熱心にこう祈りました。②するとその言葉が終った時、恐る恐る顔を擡げたお栄の眼には、気のせいか麻利耶観音が微笑したように見えたと云うのです。③お栄は勿論小さな声をあげて、また祖母の膝に縋りつきました。④が、祖母は反つて満足そうに、孫娘の背をさすりながら、「さあ、もうあちらへ行きましょう。麻利耶様は難有い事に、この御

婆さんのお祈りを御聞き入れになって下すったからね。」
と、何度も繰り返して云ったそうです。

X ①さて明くる日になって見ると、成程祖母の願がかなったか、茂作

は昨日よりも熱が下って、今までまるで夢中だったのが、次第に正氣さえついて来ました。②この容子を見た祖母の喜びは、仲々口には尽せません。③何でも稻見の母親は、その時祖母が笑いながら、涙をこぼしていた顔が、未に忘れられないとか云っているそうです。④その内に祖母は病気の孫がすやすや眠り出したのを見て、自分も連夜の看病疲れをしばらく休める心算だったのでしよう。⑤病間の隣へ床をとらせて、珍らしくそこへ横になりました。

XI ①その時お栄は御弾きをしながら、祖母の枕もとに坐っていましたが、隠居は精根も尽きるほど、疲れ果てていたと見えて、まるで死んだ人のように、すぐに寝入ってしまったとか云う事です。②ところが

かれこれ一時間ばかりすると、茂作の介抱をしていた年輩の女中が、そっと次の間の襖を開けて、「御嬢様ちょいと御隠居様を御起し下さいまし。」と、慌てたような声で云いました。③そこでお栄は子供の事ですから、早速祖母の側へ行って、「御婆さん、御婆さん。」と二三度搔巻きの袖を引いたそうです。④が、どうしたのかふだんは眼慧い祖母が、今日に限っていくら呼んでも返事をする気色さえ見えません。⑤その内に女中が不審そうに、病間からこちらへはいって来ましたが、これは祖母の顔を見ると、気でも違ったかと思うほど、いきなり隠居の搔巻きに縋りついて、「御隠居様、御隠居様。」と、必死の涙声を挙げ始めました。⑥けれども祖母は眼のまわりにかすかな紫の色を止めたまま、やはり身動きもせずに眠っています。⑦と間もなくもう一人の女中が、慌しく襖を開けたと思うとこれも、色を失った顔を見せて、「御隠居様、——坊ちゃんが——御隠居様。」と、大声で呼び立てました。⑧勿論この女中の「坊ちゃんが——」は、お栄の耳にも明かに、茂作の容態の変った事を知らせる力があったのです。⑨が、祖母は依然として、今は枕もとに泣き伏した女中の声も聞えないように、じつと眼をつぶっているのでした。……

XII ①茂作もそれから十分ばかりの内に、とうとう息を引き取りました。②麻利耶観音は約束通り、祖母の命のある間は、茂作を殺さずに置いたのです。

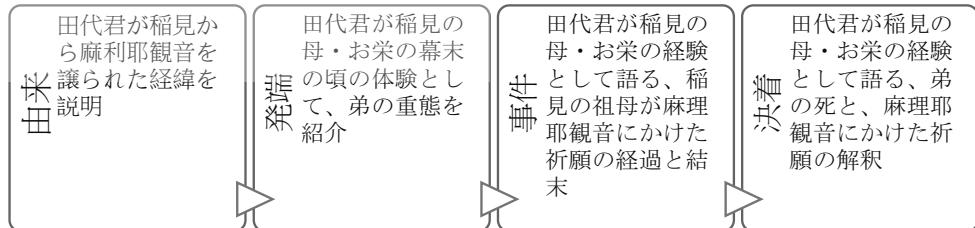
故事は、四つの部分に分かれている。第一の部分は、斜体字で示した I から III までの段落で、故事の中で「私」として出ている田代君による麻利耶観音を稻見から譲られた由来の説明である。この部分では点線部のように繰り返し「～のです」という丁寧体の「のだ」を文末に用いて、「私」である田代君の説明を強調している。この部分を「由来」とする。続く IV から XII までの段落が麻利耶観音をめぐって起こった、田代君が聞いた稻見の母親が体験した嘉永の末年

頃にあったらしい出来事の話である。この部分も二つに分かれ、第二の部分は、二重線部のようにIV①「何でも稻見の母親が十か十一の秋だったそうです」と出来事のあった時期と季節を漠然と提示し、出来事の発端である稻見の母親の弟・茂作の発病と重態が波線部のように要約の形で描かれている。これは「発端」と言えよう。¹⁷それ以下からが第三の部分として、麻利耶観音をめぐって起こった出来事の話で、V①「するとある夜の事、～祖母が～着替えさせた」と特定の時を提示して出来事の主な登場者・祖母の動きを描く形で出来事を始めている。出来事は以降、二重線部のVII①「それがおよそ十分あまりも続いてから」、IX②「するとその言葉が終った時」、X①「さて明くる日になって見ると」、④「その内に」、XI①「その時」、文②「ところがかれこれ一時間ばかりすると」、文⑤「その内に」、文⑦「と間もなく」のように、時の経過や時点を提示しながら、「～は～した」あるいは「～は～ていた」という文型で祖母、お栄、女中の動きをそれぞれ描きながら進行していく（枠囲いは登場者、その動きは下線部）。この部分は、祖母が自分の命のある間は茂作の命を救ってほしいと麻利耶観音に祈った結果、翌日茂作は回復したかに見えたが、祖母がその日に急死すると同時に、茂作も臨終を迎えたという、いわゆる時の経過に従って展開する典型的なストーリーで、麻利耶観音にまつわる出来事が描かれている。この部分は「事件」と呼ぶことにする。そして、最後に位置する第四の部分は XII①で、「茂作もそれから十分ばかりの内に、とうとう息を引き取りました」と出来事の決着が描かれ、同時に出来事に対する解釈図2 麻利耶観音の故事の文章構成

が②「麻利耶観音は約束通り、祖母の命のある間は、茂作を殺さずに置いたのです」とつけられている。これは「決着」と言えよう。故事の部分も、以下の図2のように「黒衣聖母」全体と同様に、複

¹⁷ 落合由治(2005)「ストーリーの変容—その要約、縮約および集約」『淡江外語論叢』5 淡江大学外国語文学院 pp. 177-198 参照。

数の部分で構成されている。



ある一人称の語り手が出来事を由来・発端・事件・決着の形式で語る、こうした故事の文章構成は、芥川龍之介の他の作品でもよく見られる形式で、「地獄変」「邪宗門」「妖婆」「捨子」「俊寛」等も同じ構成を取っている。また、ここにはもうひとつの特徴が繰り返し見られる。それは、この故事の語り手・田代君である「私」が、第一の部分を受け継ぐ形で点線部のように第二から第四の部分まで説明や強調の「～のです」また伝聞の「～そうです」という一定の文型で、特定の時を提示して展開している出来事の中に説明者、解釈者として入り込んでいることである。

こうした特定の文型は、伝聞であることを伝えるばかりではなく、以下のように、出来事のストーリー以外の説明や解釈を加えることで、登場者の「未に忘れられない」「看病疲れをしばらく休める心算」のような心情や、ストーリーに対する「麻利耶観音は約束通り、祖母の命のある間は、茂作を殺さずに置いた」という解釈を述べて、いわば因果関係を説明するプロットを作る機能を果たしている。¹⁸

例 5

(1) X ③何でも稻見の母親は、その時祖母が笑いながら、涙をこぼしていた顔が、未に忘れられないとか云っているそうです。④その内に祖母は病気の孫がすやすや眠り出したのを見て、自分も連夜の看病疲れをしばらく休める心算だったのでしょう。

(2) XII ②麻利耶観音は約束通り、祖母の命のある間は、茂作を殺さずに置いたのです。

¹⁸ E. M. フォースター/中野康司訳 (1994) 『小説の諸相 E. M. フォースター著作集』みすず書房参照。

類例が多く見られる、この文章構成を「体験や伝聞を語る形式」と呼ぶことにする。この形式は芥川龍之介ばかりではなく、宮沢賢治、豊島与志雄、宮本百合子、菊池寛などの作品に大正期から昭和期にかけて広く見られる。¹⁹体験や伝聞を語る形式には、それぞれの部分での明確な内容上の役割があり、同時に用いられる文の形式と機能も一定しており、こうした文章構成は近代小説のひとつの典型と見ることができる。

この形式は、各部分と文型の役割が明確に見られるため、日本語教育での体験談や経験談を、日本で語る場合の基本的な文章構成として作文や会話教育で応用できる。芥川龍之介は、近代の日本語の文章では見慣れたこの形式を、さらに話し手と聞き手の場面の中に入れ込むことで、以下のように斬新さをもたらそうとしたとも言える。

3.3.2 前言と後言の文章構成

体験や伝聞を語る形式で書かれた故事を前後に挟み込んでいる例6、例7の「黒衣聖母」の前言、後言は、短い文章ではあるが、少なくとも四種類の異なった文言(ディスコース)が用いられている。

例6 前言

I ①「どうです、これは。」

田代君はこう云いながら、一体の麻利耶観音を卓子の上へ載せて見せた。

II ①麻利耶観音と称するのは、切支丹宗門禁制時代の天主教徒が、屢々聖母麻利耶の代りに礼拝した、多くは白磁の観音像である。②が、今田代君が見せてくれたのは、その麻利耶観音の中でも、博物館の陳列室や世間普通の蒐収家のキャビネットにあるようなものではない。③第一これは顔を除いて、他はことごとく黒檀を刻んだ、一尺ばかりの立像である。④のみならず頸のまわりへ懸けた十字架形の瓔珞も、金

¹⁹ 宮沢賢治「狼森と笊森、盗森」「バキチの仕事」等、豊島与志雄「手品師」「轢死人」等、宮本百合子「二人の弟たちへのたより」菊池寛「勝負事」等、大正期から昭和期の作家は、しばしばこうした形式を用いている。作家ばかりではなく、当時の体験談を集めた読み物にも普通に見られる形式で、池田輝方「夜釣の怪」、本田親二「口本居士」(春陽堂(1911)「新小説 明治四十四年十二月号」)などの例が見られる。また、稿を改めて見ていただきたい。

と青貝とを象嵌した、極めて精巧な細工らしい。⑤その上顔は美しい牙彫で、しかも唇には珊瑚のような一点の朱まで加えてある。……

III ①私は黙って腕を組んだまま、しばらくはこの黒衣聖母の美しい顔を眺めていた。②が、眺めている内に、何か怪しい表情が、象牙の顔のどこだかに、漂っているような心もちがした。③いや、怪しいと云つたのでは物足りない。④私にはその顔全体が、ある悪意を帯びた嘲笑を漲らしているような気さえしたのである。

IV ①「どうです、これは。」

田代君はあらゆる蒐集家に共通な矜誇の微笑を浮べながら、卓子の上の麻利耶観音と私の顔とを見比べて、もう一度こう繰返した。

V ①「これは珍品ですね。が、何だかこの顔は、無気味な所があるようじやありませんか。」

VI ①「円満具足の相好とは行きませんかな。そう云えばこの麻利耶観音には、妙な伝説が附隨しているのです。」

VII ①「妙な伝説？」

VIII ①私は眼を麻利耶観音から、思わず田代君の顔に移した。②田代君は存外真面目な表情を浮べながら、ちょいとその麻利耶観音を卓子の上から取り上げたが、すぐにまた元の位置に戻して、「ええ、これは禍を転じて福とする代りに、福を転じて禍とする、縁起の悪い聖母だと云う事ですよ。」

IX ①「まさか。」

X ①「ところが実際そう云う事実が、持ち主にあったと云うのです。」

XI ①田代君は椅子に腰を下すと、ほとんど物思わしげなとも形容すべき、陰鬱な眼つきになりながら、私にも卓子の向うの椅子へかけろと云う手真似をして見せた。

XII ①「ほんとうですか。」

私は椅子へかけると同時に、我知らず怪しい声を出した。②田代君は私より一二年前に大学を卒業した、秀才の聞えの高い法学士である。③且また私の知っている限り、所謂超自然的現象には寸毫の信用も置いていない、教養に富んだ新思想家である、その田代君がこんな事を云い出す以上、まさかその妙な伝説と云うのも、荒唐無稽な怪談ではあるまい。

XIII ①「ほんとうですか。」

私が再度こう念を押すと、田代君は憐寸の火をおもむろにパイプへ移しながら、

「さあ、それはあなた自身の御判断に任せるよりほかはありますまい。が、ともかくもこの麻利耶観音には、気味の悪い因縁があるのだそうです。御退屈でなければ、御話しますが。——」

例7 後言

I ①田代君はこう話し終ると、また陰鬱な眼を擧げて、じっと私の顔を眺めた。

II ①「どうです。あなたにはこの伝説が、ほんとうにあったとは思われませんか。」

- III ①私はためらった。
- IV ①「さあ——しかし——どうでしょう。」
- V ①田代君はしばらく黙っていた。②が、やがて煙の消えたパイプへもう一度火を移すと、「私はほんとうにあったかとも思うのです。ただ、それが稻見家の聖母のせいだったかどうかは、疑問ですが、——そう云えば、まだあなたはこの麻利耶観音の台座の銘をお読みにならなかつたでしょう。御覧なさい。此處に刻んである横文字を。——DESINE FATA DEUM LECTI SPERARE PRECANDO「汝の祈祷、神々の定め給う所を動かすべしと望む勿れ」の意……」
- VI ①私はこの運命それ自身のような麻利耶観音へ、思わず無気味な眼を移した。②聖母は黒檀の衣を纏つたまま、やはりその美しい象牙の顔に、ある悪意を帯びた嘲笑を、永久に冷然と湛えている。——

第一類は、枠囲いで語り手である田代君と聞き手である私という登場者、下線でその動きを示した。以下、段落番号と文番号で示す。これは会話文と密接不可分な関係にある前言の I ①、III ①②④、IV ①、VII ①②、XI ①、XII ①、XIII ①および後言の I ①、III ①、V ①②、VI ①の文であるこれらは前文の I ①「田代君は～載せて見せた」、III ②「（私は）～心もちがした」のように「～は～した」という形式か、前文 III ①「私は～眺めていた」、後文 V ①「田代君は～黙っていた」のように「～は～ていた」という文型である。これらと密接な関係にある前言 V ①、VI ①、VII ①、IX ①、X ①、後文 II ①、IV ①、V ②は「～」付きの会話文で、「～は～と言った」のような形で「～は～した」と同形式を入れることができる文である。これらは、いずれも田代君と私のその場での身体や心の動きを示している文言であり、作品中の登場者の動きを描いている、所謂ストーリーに当たる部分として、前言から後言に進むストーリーの動きを産み出している。また、前言で故事の語り手である田代君と聞き手である私および因縁話の中心要素である麻利耶観音を登場させ、実際に麻利耶観音を見ながら、田代君の話しを私が聞くという体験としての場面を作つてから故事を田代君が語り始める。先に見た故事は前言の後に置かれることで、田代君が私に語つて聞かせた話として、より鮮明に読者に印象付けられる。そして、故事が終わった後、田代君が私に意見を求める形で故事に対する意味づけが行われること

で、不思議な因縁話の真偽が読者に問われることになる。故事を語る場面とストーリーの中に故事を入れ込むことで、時代の離れた故事は体験談としてさらに臨場的になり、不思議な話であってもそれは本当かもしれないという印象をより強く読者に与えていると言えよう。以下の三つの文言は、その臨場感を強化するために用いられている。

第二類は、斜体字のⅡ①～⑤、XII②③のまとまりおよび後言VI②で、主には「～は～である」「～らしい」「～ない」「～まい」という、いわゆる判断モダリティ形式²⁰の文言で作中に登場する麻理耶観音や田代君について説明している。第二類は私が心の中で語る言葉のように読めるため、田代君が語る話しでありながらそれを私の文言が包む形式になり、読者には私が眼前に見て、感じている内容として受け取られ臨場感を強めているといえる。同時に、第三類の破線部のⅢ②「心もちがした」、③「～では物足りない」、④「気さえした」のように、聞き手がその場で感じているリアルな臨場感覚の文言が付け加えやすくなるであろう。さらに、第二類があることで第一類の会話文は「私」が実際に聞いている内容になり、「私」に読者が意識を重ねることで「私」＝読者という形で読者自身が田代君の話しの聞き手になることを助けているとも言えよう。第二類、第三類は話しの聞き手であることの現実感を生み出す表現と考えられる。一方、視覚的にも工夫がなされており波線部の「～しながら～」または「～して～」という形式を持つ第四類の前言IV①、VIII②、XI①および後言I①の田代君の表情の形容と、私の見た「～な」「～した」という形式の形容がつけられた後文IX①が入ることで、第一類は実際に田代君の話を聞きながら、その場面を聞き手の私が見ているかのような形で進行することになる。

以上、前言と後言に見られる四種類の文言は、第一類で話し手と聞き手の場面を構成しながら、臨場感を強化するための三つの表現

²⁰ 日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法〈4〉第8部・モダリティ』くろしお出版参照。

が用いられることで、体験談としての故事をさらにリアルに読者に提示し、内容の真実性を訴求する効果を生み出していると言える。

芥川龍之介の作品には、「黒衣聖母」のように、話し手と聞き手を前言と後言に出て、その間に特定の時に起こった出来事や故事、あるいは伝聞を語る形式の体験談や聞き書きを入れた作品は「秋山図」「奇遇」「妙な話」「運」等少なくない。その他、何らかの形式で前言と後言をつけ、その間に出来事や体験などの話を挟みこんだ作品は、「尾形了齋覚え書」のような書簡形式から「煙管」のような歴史小説形式、「河童」のような寓話形式等々、形式や内容は非常に多様性に富んでいるが、似た文章構成を芥川龍之介は多用している。そればかりではなく、故事や体験談を語り手と聞き手の前言・後言で挟み込むことで「実際そう云う事実が、持ち主にあった」という対話性の語りを読者に伝える、こうしたテクストは近代の志賀直哉や佐藤春夫などの作家には普通に見られ、現在の日本で生産されている都市伝説やメディアの映画、テレビドラマなどでも常用されるテクストであり、対話性の語りを読者に伝える、こうしたテクストは私小説や心境小説あるいはそのバリエーションと並んで、近代的受容者に極めて好まれるテクストジャンルの一種と言えよう²¹。その点で、2.3.1の経験や伝聞を語る形式と同様に、日本語教育で基本的文章構成として応用することができる。

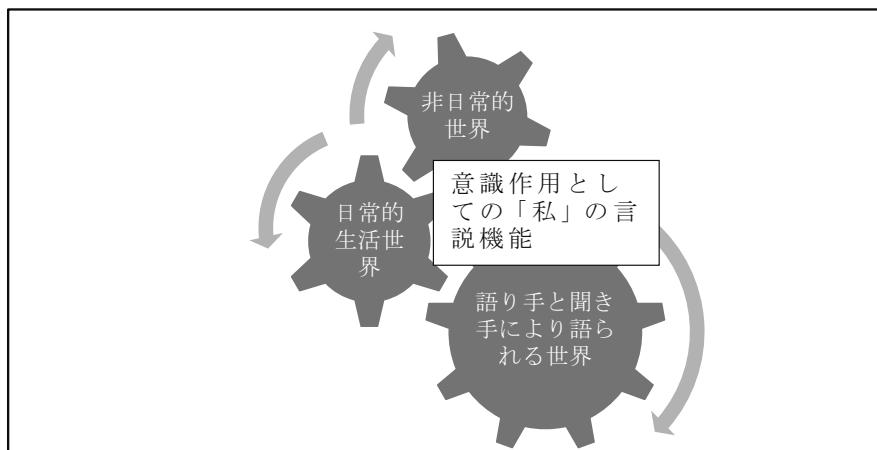
3.4 「黒衣聖母」のテクスト的機能

以上、「黒衣聖母」の文章構成について見てきた。そのままではただの逸話や伝説にしか過ぎない麻理耶観音の故事に、芥川は実際に誰かが語り「私」がそれを聞くという前言、後言を加えることで、「実際そう云う事実が、持ち主にあった」という体験談に故事を置

²¹ 志賀直哉「濁った頭」、佐藤春夫「日章旗の下に」などこれらの近代作家では常用されている文章構成である。日本ではフジテレビ「本当にあった怖い話」「世にも奇妙な物語」等都市伝説による非日常的体験談が続けて放映されている。フジテレビ「本当にあった怖い話」<http://www.fujitv.co.jp/honkowa/index.html>、「世にも奇妙な物語」<http://www.fujitv.co.jp/kimyo/>（2015年6月9日閲覧）

換していると言えよう。これは近代日本の私小説や心境小説を求める読者の志向に対して、体験談の文言装置を用いる一種の認知バイアスを設けることで「実際そう云う事実が、持ち主にあった」というフレーミング効果を逸話や伝説にもたらす文法である。

図3 前言と後言によるフレーミング効果



文学的意図を想像すれば、江戸時代の日本で流行して明治以降の近代化過程で衰退していった百物語などの怪談の近代的組み替えではないかとも思われる。ある異常な、あるいは不思議なこうした体験の故事の前後に、それを実際に語る人と聞く人という場を設けるテクストは、現代の都市伝説やテレビドラマなどでも常に用いられている近代の定式化した形式である。以上の図3のように現実的な合理性の支配する日常的生活世界は、こうした文言装置により非合理的で容易に理解できない世界を一方に浮かび上がらせて、両義性を帯びるようになる。²²芥川がこうした作品を残したことには、近代合理主義の明晰判明な一義的世界像あるいは人間像に対し

²² ここでの両義性はフッサールの後期思想に見られるような経験科学や生活世界の意識への現象学的還元が提示する一種の結果とする。宇都宮京子(2000)「『合理』のもつ可能性と限界」『社会学評論』50-4 pp. 480-495、山田治(2004)「後期フッサールにおける生世界概念」『言語と文明:論集2』 pp. 136-154 等参照。

て、世界自体と世界内存在としての人間意識の両義性を浮かび上がらせる非了解的な意図があったかもしれない。こうした両義性を成立させるのは意識作用としての「私」の言説機能で、芥川は「私」的言説が産み出す両義性の構造を十分に熟知していたと言えよう。

4. おわりに

言語に対するソシュール的ラングとして的一般性と、パロール的芸術性の双方の性格を統一する作用としてバフチンは具体的ジャンルをもった発話と書記のテクストの対話性を提起した。今回は芥川龍之介の作品を事例として、実際に近代日本で典型的なテクストとして用いられ、現代でも用いられている話し手と聞き手という対話性のある、故事の前言後言による挟み込みという文章構成を持つテクストを通じて、具体的ジャンルを持つテクストに見られる対話性の様相を考察した。こうした考察で大事な点は、通常は規則性が明確ではないと思われている作品単位のような言語単位であっても具体的言説内容と言語形式が明確に対応して、全体が整然とした機能を持ち、しかもそれが小説、体験談、聞き書きなどの具体的ジャンルの中で非常によく似た文章構成と表現形式で社会的に広く使用されているという点である。こうしたテクストは表現革新の基盤となると同時に、多様な作品となって言語の文化を育み、それが社会的に広く用いられている点で教育的応用が可能になる道を開いている。具体的ジャンルを持ったテクストの様相は多様であり、対話性のあり方もまた多様ではあるが、その中に事例として代表性を持ちえるようなテクストが存在していることは確かである。こうした代表性のあるテクストの探求を通じて、さらに豊かな対話性のあり方を見出し、言語研究の対話化を目指していきたい。

注記

本論文は2015年7月「第4回村上春樹国際学術研討会」で一部を発表したものと加筆訂正したものである。また、本論文は台湾科技部専題研究103-2410-H-032-047-MY2の成果の一部である。

テキスト

筑摩書房（1996/1986）『芥川龍之介全集 3』筑摩書房（注：岩波書店版（1995、1996）全集は新字体漢字旧仮名遣いのため教育応用を考慮して現代表記のテクストとして使用）

参考文献(筆者名五十音順)

- 葦原恭子（2011）「日本語の談話におけるコミュニケーション機能－「わかる」と「知る」を中心に」『留学生教育』8
- 庵功雄（2012）「日本語教育文法の現状と課題」『一橋日本語教育研究』
- 内田諭、藤井聖子（2015）「クラスター分析とフレーム分析による語彙のジャンル別特徴：「現代日本書き言葉均衡コーパス」を用いて」『言語文化論究』（34）
- 宇都宮京子（2000）「「合理」のもつ可能性と限界」『社会学評論』50-4
- 大野春見（1994）「初級文法項目における絵で表す場面情報の役割」『日本語教育方法研究会誌』1-2
- 小川治子（1993）「「すみません」の社会言語学的考察」『言語文化と日本語教育』6
- 落合由治（2005）「ストーリーの変容—その要約、縮約および集約」『淡江外語論叢』5 淡江大学外国語文学院P177-198
- 姜惠彬（2013）「芥川龍之介「黒衣聖母」論：メリメ「イールのヴィナス」との比較分析を通じて」『稿本近代文学』38
- ぎょうせい（2013）特集「近代小説の文体」『国語と国文学』90-11
- 須田千里（2011）「芥川龍之介「切支丹物」の材源--『るしへる』『じゅりあの・吉助』『おぎん』『黒衣聖母』『奉教人の死』』『国語国文』80-9
- 田所希佳子（2007）「初級におけるコミュニケーションのための文型練習の方法－「場面ドリル」の提案」『早稲田大学日本語教育実践研究』6
- 田中誠（2011）「ノルウェイの森』における「ように」の翻訳研究—異なる翻訳者はどう表現したか」『長崎国際大学論叢』11
- 丹治恒次郎（1998）「言語コミュニケーションと表現の概念：バフチンとヴァレリーから考える」『言語と文化=言語与文化』1
- 永尾章曹（1991）「近代小説の表現.4 芥川龍之介——文章構成について」表現学会編『表現学大系・各論篇』12 教育出版センター
- 西口光一（2013）『第二言語教育におけるバフチン的視点—第二言語教育学の基礎として』くろしお出版
- 西口光一（2015）「ことばのジャンルと基礎第二言語教育のデザイン」『多文化社会と留学生交流：大阪大学国際教育交流センター研究論集』19
- 日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法（4）第8部・モダリティ』くろしお出版
- 日本語学会編（2014）「<特集>2012年・2013年における日本語学界の展望」『日本語の研究』10-3 日本語学会
- 波多野完治（1941）『文章心理学入門』三省堂
- 馬場俊臣「接続詞の二重使用的の承接順序及び文体差：『現代日本書き言葉均衡コーパス』全ジャンルによる追加調査」『北海道教育大学紀要・人文科学・社会科学編』65-1
- E. M. フォースター/中野康司訳（1994）『小説の諸相 E. M. フォースター著作集第8巻』みすず書房
- 前田直子（2014）「文法（理論・現代）」「<特集>2012年・2013年における日本語学界の展望」
- 松丸真大（2003）「原因・理由を表す接続助詞の切換え」『阪大社会言語学研究ノート』5
- 安本美典（1958）「文学の統計的研究法について」『統計科学研究』2-2
- 山田治（2004）「後期フッサーにおける生世界概念」『言語と文明：論集2』

References (アルファベット順)

- Ashihara, K. (2011) *Nihongo no danwaniokeru Komyunikeshonkinou: "Wakaru" to "Shiru" wo chushinni. Ryugakuseikyoiki, N08*
- Baba, T. *Setsuzokushino nijyushiyouno syosetsujyunjyo oyobi buntaisa: " Gendainihongo kakikotobakin koukoopasu" zenjyanruniyoru tsuikachosa. Hokkaidokyoku kudai gakukiyo: Jinbunkagaku&Syakaikagakuhon, N065-1*
- E. M. Forster. Nakano, K. (Trs.) (1994) *Shosetsuno shoso. E. M. Fosutaachosakusyu,*

- VOL8. Misuzushobo, Japan.
Gyousei(2013)Tokusyu" Kindaisyōsetus no buntai" . Kokugoto kokubungaku, N090-11.
- Hatano, K. (1941) Bunshoshinrigakunyomon. Sanseido, Japan.
- Iori, I. (2012) Nihongobunpou no genjyo to kadai. Hitotsubashikyouikikenkyu, N01
- Kyo, K. (2013) Akutagawa ryunosuke" Kokuseibo" ron:Merime" Iruno binasu" tono hiakubunsekiwotujite. Kuhonkindaibungaku, N038
- Maeda, N. (2014) Bupo" Riron&Gendai" . In " Tokushu" 2012nen&2013nenniokeru Nihongogakkaino tenbou. Nihongono kenkyu, N010-3. Nihongogakkai.
- Matsumaru,S. (2003) Genin&Riyuwo arawasu setsuzokujyoshino kirikae.
- Handaishakaigengogaku kenkyu noto, N05
- Nagao, S. (1991) Kindaisyōsetsuno hyōgen N04:Akutagawa ryunosuke: Bunshokouseinititsuise. Hyogengakkai (Eds.) *Hyogengakutaikei:Kakuronhen*, Vol12. Kyōkusyuppansenta, Japan.
- Nihonkiyutsubunpokenkyukai (2003) Gendainihongobunpou N04:Dai8bu Modaritii. Kuroshio syuppan, Japan.
- Nihongogakkai(Eds.) (2014) " Tokushu" 2012nen&2013nenniokeru Nihongogakkaino tenbou. Nihongono kenkyu, N010-3. Nihongogakkai.
- Nishiguchi, K. (2013) Dainigengokyoikuno kisotoshite. Kuroshiosyuppan, Japan.
- Nishiguchi, K. (2015) Kotobanojojanruto kiso:Dainigengokyoikuno dezain. Tabunkashakaito ryugakuseikouryu: Oosakadaigaku kokusaikouryusentakenkyuronshu, N019
- Ochiai, Y. (2005) Storino henyou:sonoyoyaku, syukuyaku oyobi syuyaku. Tankougaigoronsou, N05
- Ogawa, H. (1993) " Sumimasen" no shakaigengogakutekikousatsu. Gengobunka to Nihongokyoiku, N06
- Ono, H. (1994) Shokyubunpoukoumoku niokeru edearawssu bamenjohono yakuwari. Nihongokyoikihoukenkyukaishi, N01-2
- Suda, C. (2011) Akutagawa ryunosuke" Kirishitanmono" no zaigen: " Rushiheru" " Jyuriano Yshikichi" " Ogin" " Kokuseibo" " Houkyounin no shi" . Kokugokokubun, 80-9
- Tadokoro, K. (2007) Syokuuniokeru komyunikeisyonnnotameno bunkeirensyuno houhou: " Bamendoriru" no teian. Wasedadaigakunihongokyoikujissenkenkyu, N06
- Tanaka, M. (2011) " Norueino mori" niokeru " Youni" no honyakukkenkyu:Kotonaru honyakushahadouhyogenshitaka. Nagasakikokusaidaigakuronshu, N011
- Tanji, T. (1998) Gengo komyunikeisyonto hyougenno gainen:bafuchinto barerikarakangaeru. Gengotobunka, N01
- Uchida, S.&Fujii, S. (2015) Kurasutabunseki to furemubunsekiniyoru goino janrubetsutokucho:" Gendaikakikotobakinkoukopasu" wo mochiite. Gengobunkaronkyu, N034
- Utsunomiya, K. (2000) " Gouri" no motsu kanousei to genkai. Shakaikagakuhyoron, No50-4
- Yamada, H. (2004) Koukfussaaruniokeru seisekaigainen. Gengoto bunmei: Ronshu2
- Yasumoto, M. (1958) Bungakuno toukeiteki kenkyuhounitsuite. Toukeikagakukkenkyu, N02-2

※2015年9月5日原稿受理、10月8日審査通過